

先生に怒られた。ああ、本当についてない。

隼^{じゆん}

緑のカーテンの担当になったとき、仕方ないな、と隼は思ったのだ。正直面倒くさかったけれど、節電のために朝顔を植えて、緑のカーテンを作ろう、と言い出したのは自分だったから。

「仕方ない」で始めたことだったのに、本葉が何枚も出て、つるがすいすい伸びて、小さいポットから大きなプランターに植え替えたころには、朝顔のことがすっかりかわいくなってしまうていた。

でも、そんなふうと思うと、隼の胸の中に、ずきんと痛いところができる。

ごん。

飼っていた犬のことを思い出すからだ。世話する何かをかわいく思うのは、なんだかごんに申し訳ない。ごんは、春に死んでしまった。

植えたのは西洋朝顔だ。三階建ての校舎の屋上まで伸びる、と相談ののってくれた理科の先生が言った。

「花の時期は遅くて、八月ごろから咲くね。朝のうちだけでなく一日咲いてるから、満開になったら緑のカーテンというより、青のカーテンみたいになる」

もうすぐ夏休み。今、朝顔はあと少しで二階の窓に届きそうだ。

それなのに、あの小学生のやつ。朝顔を抜こうとするなんて。

思い出すだけで腹が立つ。またいたずらしに来やしないだろうな。

朝と夕方、隼は朝顔に水やりをする。緑のカーテン担当は、もちろん隼ひとりではないけれど、他の子たちは部活があつて、朝練だの練習試合だので忙しい。隼は部活に入っていない。五月に転校してきたばかりなのだ。

夏休み中、水やりをどうしよう。当番を決めても、やっぱり部活の子はそっちを優先するんだろう。結局僕が来ることになるんだな、と隼は思った。まあ、仕方ない。僕が言い出したことなんだもの。

健太

家に帰りたいくない。別に学校が好きじゃなくても、できるだけ長いこと学校にいたい。そうすれば、家に帰るのが遅くなる。

今日は終業式だった。夏休みなんかはないほうがいい。学校に来て、給食を食べて、校庭で遊んでいられればいいの。